

知らない。

行場のあった押川の里

根来寺の北、押川の里へは、寺域の西を南流する蓮花谷にそって北上し、『紀伊統風土記』にある田塚峠（巨塚口）をへて押川に入る。いまは途中の峠付近からは歩行できず、また西方あたりも土砂採集などで通行はできない。いまは根来と金龍寺を結ぶ風吹峠のトンネル北口から東への道をとって押川に入る道のみである。

『紀伊統風土記』は、押川村について、「人家十餘戸僅に一溪谷の中にあり、村中を流るる川を駕川といふ。川の上に駕淵あり、毎歳大晦日駕鴛一雙来りて此の淵に遊ぶ。故に村名もこれを取りて名つくといふ」と押川の村名の由来を記している。

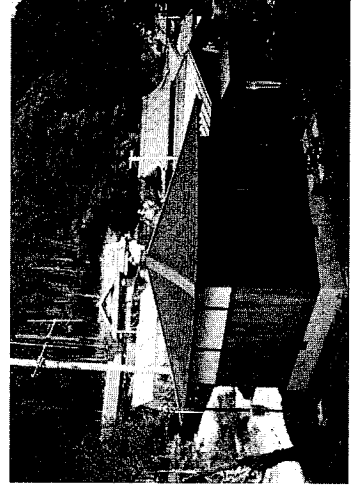
押川の入口に山王権現社と萬福寺がある。ともにトタン葺きの新しい建造物で、神社は日吉神社といて、日吉大神を主神とし、右に九頭明神、左に八王子が祀られている。石段下の萬福寺は、根来寺の末寺で、堂内の中央に観世音菩薩が厨子に祀られ、右に弘法大師、左に三体の尊像がある。なお境内の石鳥居には、「明和二年（二七五）九月、石工 樽井村住長九郎」とある。

押川の里のはずれに駕淵がある。道の右側の谷は深く落ちこみ茂った樹間の下に、青緑の淵が岩壁の下にみえる。この岩壁について『紀伊統風土記』は、「護摩の窟とよぶ。五の石佛を安ず、建徳二年（二七〇）の文字を彫り、東十歩不動堂あり」とあって、南北朝時代に護摩が焚かれ、不動堂があるなど、この秘所が修験の行所として重要な場所であったことを物語っている。水害もあり五仏の石像や不動堂はないが、やや平坦な川岸にある石碑には、「建徳二年霜月廿四日、大願主定堅」と刻されて現存している。

また、押川の里には、「十八箇秘所」があったと同書に記されている。とくに「此の地、葛城峰中にありて最深邃なり。故に行所多し、十八箇の秘所といふあり」と記されている。

修験の道は、押川から川ぞいの道を源流につくと、そこは土仏峠となり、根来寺からの道に合し、二瀬川にそって今畑・中畑・神通を経て犬鳴山に通じている。この土仏峠は、『紀伊統風土記』に、「土佛山」として、「山ノ上より民（北夷）の方を下ること二町許にして清泉湧出る所あり。これを加持水といふ。弘法大師、葛城修行の時、此水を加持して山上の土を煉り己の塑像を作る。これより山を土佛山といひ水を加持水といひ伝ふ」とある。

⑤ 復刻版第一輯六一一頁。



押川の萬福寺



押川の駕淵

⑥ 復刻版第一輯六一二頁。

⑦ 復刻版第一輯六一七頁。

八、倉谷山と二瀬川の里

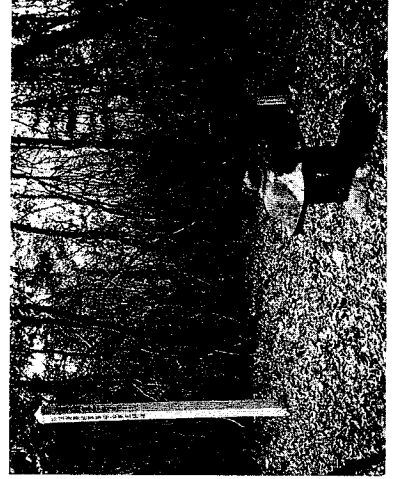
倉谷山の経塚

土仏峠から東へ尾根を進むと倉谷山である。また峠から北へ林道をとおり、「馬ワカレ」の三叉路を東へ一*ほどで倉谷山への山道らしき道を登ることもできる。

倉谷山の最高所には、赤白のポールがたっており、独立標高点の観測地をあらわしている。その西の山頂は、落葉の重なる平坦な地に小さな石祠と灯籠があり、脇に「薬草諭品第五経塚」の標識がたっている。雑木林に囲まれた閑静な地である。

経塚とされる石祠は、和泉砂岩の高さ六三センチで四面して扉はなく、「カンマン」不動明王の梵字が刻されている。踏査時には、その後に朽ちた卒塔婆があり、碑伝が八本、木に結ばれていた。那智山・犬鳴山・翻青連阪奈支部、大峰大先達のものであった。

倉谷山の経塚



① 仏の慈悲が草木に平等に注がれるように、例を引いて慈悲と救いを説く。

鎌倉期の『諸山縁起』も室町期の『葛城峯中記』も「閻谷宿」とあるが経塚は記されていない。一方、江戸期の向井家の『葛城峯中記』は「中畑村入口より十丁半、右の谷へ行く、経塚」とあり、幕末の『葛嶺雜記』も、今畑の項に「この里より倉谷山の経塚遥拜」として、「妙薬草諭品第五之地」と明記し、智航上人は、

墨染めの 閻谷山に何人の

華をし見けん よきとめの塚

と詠っている。このように第五経塚が江戸期には根来寺から倉谷山へ退転していたと考えられる。

そして倉谷山は、「稚児が墓」ともいわれ、『紀伊統風土記』にも「児墓」と描かれているが由来は不明である。

今畑の里

この倉谷山の峰つづきには、『諸山縁起』にでる「蜘蛛留」「大遣水宿」がある。この位置は、『紀伊統風土記』に、現打田町の東山田の北に「大遣水宿」、西山田の北に「蜘蛛留」とある。東山田村の「金剛童子」に「村の北十五町許、山ノ上にあり遣水宿ともいふ山伏の行所なり」とあり、いまの中畑へ越える中畑峠付近に当たる。また



今畑から倉谷山を望む

② 復刻版第一輯六一九頁。

③ 復刻版第一輯六六〇頁。

西山田村の「蜘蛛宿」に「村の北十八町許、山ノ上にあり山伏の行所なり」と記され、場所は今畑への峠道付近と考えられる。いまこれらの峠の尾根は車道となっている。修験のコースは、倉谷山から北へ、二瀬川に下り今畑の里にでる。

『紀伊統風土記』の天保一〇年（三三〇）ごろには、中畑とともに家数二軒とあるが、いまは全くの廃村となり、四軒の廢屋が不気味で、三軒ほどの屋敷跡には雑木が茂り、まことに淋しい風景である。また『葛嶺雜記』の「今畑多聞寺」には、「白髭明神、本地毘沙門、丹生社、神変大士祠」とあり、『統風土記』には「天野四社明神社」とあって、その社地にはいまも白髭明神社や弁財天社・八王子社・若宮八幡宮、神変大士祠、金剛童子などが残っている。付近の石灯籠に「白髭神社御宇前」「文化元（二〇四）大十月、奉正建四ヶ所今畑村」「奉建立石灯籠、岩出東山下十四ヶ村」とあって、今畑をはじめ岩出町方面の信仰が厚かったことがわかる。白髭神社を祀るのは、地侍であった佐々木家が近江国から勧請した社で、白髭党として戦国期の武士の里であった。この社地の右手に朽ちた小屋がみえる。これが今畑の多聞寺で、かつて新義真言宗根来律乘院の末寺であった。廢屋の中に、毘沙門天と僧の像があるだけで荒れるにまかされている。

④復刻版第一輯六一八〜六一九頁。



今畑の白髭明神社

中畑の里

今畑の下流に中畑の里がある。

『葛嶺雜記』には「中畑来迎寺、根来寺末、九頭龍明神、本地十一面、八王子社」とあるが、『紀伊統風土記』には「来迎寺、真言宗古義、豊田村福琳寺末」となっている。いずれにしても修験の里として重要であり、向井家の『葛城峯中記』にも中畑村庄屋弥十郎の家で宿泊している。来迎寺は、いまは新しい公民館を兼用しており、館内の正面にある立派な厨子に、阿弥陀如来の立像が新しく小さいので、十一面観音像が入れられてあったと考えられる。右に聖観音と弘法大師、左に不動尊と地藏尊が祀られている。

もとの来迎寺は道をへだてた墓地にあったと地元の人はいう。この東に九頭龍明神社があったが、いまは村の西端の山腹を登ったところに立派な社殿がある。左に小さい八王子社と並んで祀られている。社殿の右側に、和泉砂岩の石祠が三基ある。右の石祠内には、「ア」(大日如来)、「バン」(釈迦如来)、「ウン」(弥勒菩薩)と「淨梵大王」とあり、正徳元年（七二）八月とある。

⑤復刻版第一輯六六一頁。



中畑の来迎寺



中畑の九頭龍明神社

神通の万蔵地藏

中畑から二瀬川にそって神通に向かうと、左手からの溪谷に、一ノ滝・二ノ滝といわれる行所がある。一ノ滝は水書のあと分からないが、二ノ滝は「行者ノ滝」といわれ、その傍らの道に石祠が祀られている。

その下流に神通の里がある。『葛城先達峯中勤式廻行記』という元禄中期（云空丁三〇）ごろの記録には、^⑥「庄司家ニテ行法一座修之、アカイ、森住吉也、金剛童子、毘沙門寺、地藏、山王ノ森、明神善也、妙見井屋敷也、金剛童子川ノ向、栗木尊者所ナリ」と多くの行所が記されている。

このうち、「地藏」は『続風土記』の「地藏石像」で「村の巽の方六町許にあり、萬蔵地藏といふ山伏の行所なり」と記され、いまでも万蔵地藏は神通の東の旧道傍の山麓に祀られている。前にある大杉が谷川を背にいかにも由緒ありげにみえる。いつも「奉納、南無地藏菩薩」の幟がたっている。

万蔵地藏は、小さなコンクリートの祠の中に三つに割れた七〇センチほどの石像の地藏である。

また「明神春日也」は、神通の島居のある広い境内をもつ浦上神社のことである。境内の常夜灯に「大峯山夜燈」「三拾三度」「嘉永七年

⑥ 前掲『修験道資料集Ⅱ』二六二頁。

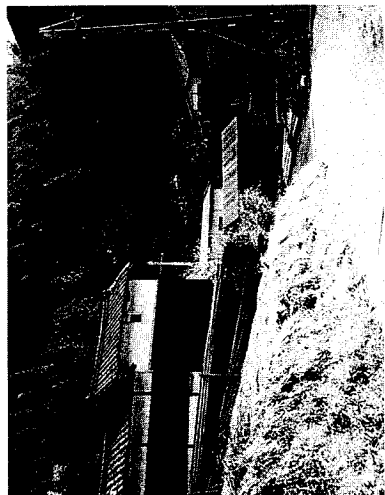
⑦ 復刻版第二輯六六二頁。

神通の万蔵地藏



九月」「当村講中世話人伊助」と砂岩に刻されている。「大峯登山三拾三度」の名がつくから修験の行所に間違いはない。

このように二瀬川にそって、今畑、中畑、神通の里は、『萬嶺雜記』にも「三ヶ畑について高祖（役行者）の御ゆかり深きにや、中津河とひとしく往古より課役免除の里なり」とある。



神通の里



神通の春日神社